

バックスをアジアで紹介

指揮者ジョシュア・タンへのインタビュー

シンガポールの指揮者ジョシュア・タンはアジア全域のプロ及びユース・オーケストラでの指揮で国際的に高い評価を得てきた。ヴァイオリニストとして活動したのちシャルル・デュトワの指導を受けたことをきっかけに指揮を志し、アメリカのジュリアード音楽院、イーストマン音楽学校で学んだ。タンは大胆なプログラミングと聴衆に馴染の薄い作品を紹介する取り組みによって知られており、定期的にオーケストラの標準的なレパートリー以外の作品を探求している。

これからのシーズンでは、首席指揮者を務めるシンガポール・ナショナル・ユース・オーケストラと日本の広島交響楽団でアーノルド・バックスの交響曲第6番を指揮する。両国での同作品の初演になるようだ。インタビューでタンはバックスとの出会い、交響曲第6番の難しさ、バックスという作曲家の素晴らしい音の世界と出会った音楽家たちの反応について語ってくれた。

【リチャード・アダムズ】

指揮者になる前はヴァイオリニストとして研鑽を積まれていた訳ですが、どういきっかけで指揮者になろうと思われたのでしょうか？

【ジョシュア・タン】

ヴァイオリニストとして音楽活動を始め、プロのオーケストラの中で演奏していました。その時期にシャルル・デュトワ氏と知り合い、真剣に指揮を考えてみるよう勧められました。それで結局指揮者への道をフルタイムで追及しようと決心し、アメリカで更なる勉強をすることになりました。

【リチャード・アダムズ】

アーノルド・バックスの音楽に最初に出会ったのはいつだったのでしょうか？

【ジョシュア・タン】

正直、広島交響楽団から提案されるまで交響曲第6番については何も知りませんでした。もちろん作曲家バックスの名前と彼の室内楽作品は何曲か知っていました。弦楽器奏者でしたので特にヴィオラ・ソナタやヴァイオリン・ソナタは知っていました。しかし、彼の交響曲は滅多に演奏されません。

最初に交響曲第6番を聴いた時は、本当に驚きました。素晴らしい音楽だと思い、すぐに指揮をお受けしました。オーケストラのメンバーも聴衆もこの作品を聴けば私と同様に感じるのではないかと確信したのです。

【リチャード・アダムズ】

シンガポールと広島での公演は同地、そしてアジア全体での第6交響曲の初演になるようです。なぜプログラムに入れようと決心されたのでしょうか？

【ジョシュア・タン】

この作品を知った時、世に知られる価値のあるものだと思確信しました。優れた音楽は優れた音楽です。作品が説得力のある心をつかむようなものであれば、たとえまだ知られていない作品でも演奏されるべきだと思います。私はやや見過ごされてしまっているような作品をプログラムに入れようとたびたび試みています。例えば、シンガポールではウォルトンの交響曲も素晴らしい作品であるにもかかわらず滅多に演奏されません。

【リチャード・アダムズ】

アジアのオーケストラのメンバーはバックスのことを良く知っていますか？

【ジョシュア・タン】

いいえ。(シンガポールで) リハーサル前に話をしたメンバーで第6交響曲のことを知っている人は一人もいませんでした。しかし、彼らは私のプログラムの選択を信じてくれました。リハーサルを始めてみると何人ものメンバーがやってきて「これは驚くべき音楽だ」と言っていました。

【リチャード・アダムズ】

バックスはエルガー、ヴォーン・ウィリアムズ、ウォルトンというような作曲家の影になって目立たないと言う評論家もいます。どう思われますか？

【ジョシュア・タン】

バックスが、今おっしゃったような作曲家達に並ぶ作曲家であることに疑いはないと思います。第6交響曲は英国の偉大な交響曲と全く同じレベルにある作品です。幾つかの部分においては先ほど述べられたような作曲家達より上だと言う人もいるかもしれません。

単に異なった音楽なのです。バックスは自身の音楽言語と音色を持っていました。

【リチャード・アダムズ】

バックスの交響曲は時折ラプソディー的だとか構成が緩慢と評されてきました。交響曲第6番にそのようなことを感じられましたか？

【ジョシュア・タン】

いいえ、私はとても良く構築された作品だと思います。最も魅了されたのは、作品の中にたくさんの発見があることです。スコアを見るたび、あるいはリハーサルを行うたびに何か新しい発見があるのです。

これは偉大な音楽の特質だと思います。ベートーヴェンやブラームスに似ています。しばらく時間をおいてから作品と向き合ってみると、易しくなるどころか以前よりもっと難しく感じます。何故ならそれがどれだけ深遠な作品かに気づくからです。

人生経験の変化とともに音楽が成長するのです。

【リチャード・アダムズ】

バックスのオーケストレーションは豊かで層が厚いことで有名です。リハーサルは難しいでしょうか？

【ジョシュア・タン】

難しいかどうかはどのようなオーケストラで、どのくらいリハーサル時間があるかによります。技術的には交響曲第6番は他の主要な管弦楽作品ほど難しくはありません。各楽器の特性を捉えて非常に良く書かれた作品です。

曲を通じて素晴らしいソロが登場します。例えば、ヴィオラ・セクションやチューバにも。バックスはオーケストラを熟知していたのだと思います。

最も重要なことは、明確な解釈の考えを持ち、それをオーケストラのメンバーに伝えることです。

【リチャード・アダムズ】

特に難しいと感じるような楽節はありましたか？

【ジョシュア・タン】

第2楽章は速度の点で興味深いです。主題が形を変えて何度か戻ってくるのです

が、バックスはところどころに「a tempo (元のテンポに戻る)」とか「tempo primo (最初のテンポに戻って演奏)」と書いているのですが、具体的にどんなテンポを意味しているのか速度記号は示されていません。

従って、解釈にも余地が生まれます。音楽の感情的な性格はどんなテンポを選択するかで著しく変わってきます。

私は時には自分の考えを直ぐに強いるのではなくオーケストラがどう反応するか見てみるほうが好きです。リハーサルの中にオーケストラと一緒に色々な可能性を探ってみるのです。

【リチャード・アダムズ】

タンさんはプロのオーケストラだけでなくユース・オーケストラの指揮もされていますね。よく知らない作品に出会った若い音楽家の人達にはどんなアドバイスをされますか？

【ジョシュア・タン】

偏見を持たず音楽に没頭するように、といつも言っています。

私が幼い頃、クラシック音楽と出会ったことにより深い感情的な影響を受けました。プロの音楽家になったのもその経験が一つのきっかけです。

すばらしい音楽は人々にとても深い影響を及ぼします。たとえ音楽家がある作品に直ぐには共感を覚えなくても、何年か経って再びその曲に触れた時、その作品の持つ意味を見出すかもしれません。

【リチャード・アダムズ】

アジアの聴衆にバックス作品は受け入れられると思いますか？

【ジョシュア・タン】

作曲家の出身に拘わらず、どんな場所においてもすばらしい音楽には聴衆が存在すると思います。作品が人を動かす説得力のあるものであれば聴衆は良い反応を示してくれるでしょう。

【リチャード・アダムズ】

最後に、聴衆にはバックスの交響曲第6番から何を感じ取って欲しいと思われてい

ますか？

【ジョシュア・タン】

演奏会に来られる方々には、心を開いて耳を傾けていただきたいです。そうすれば、この作品の中に何かすばらしいものがあることに気づいていただけたらと思います。